



2 野 菜

項 目	作 業 内 容
<p>(1) いちごの定植</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○いちごの定植 ○果菜類の管理 ○秋まき野菜の栽培管理 ○台風対策 <p>ア ほ場の準備</p> <p>品種と作型に沿って、9月上旬～下旬を目途に定植する。土耕栽培では、秋雨が続くと本ぼの準備ができないため、早めに畝を立ててビニルをかけるなどし、すみやかに定植できるようにする。</p> <p>イ 定植時期</p> <p>いちごは、自然条件下で8月下旬頃からの低温・短日条件に反応して花芽分化する。育苗後半にチッ素肥料を切り、苗の体内チッ素濃度を低下させることで花芽分化を促進させる（8月号を参照）。検鏡により花芽分化を確認してから定植し、未分化苗定植による頂花房の開花遅れやバラツキを防止する。</p> <p>ウ 病虫害防除</p> <p>定植前に苗をよく観察し、炭疽病や萎黄病などが疑われるものは廃棄し、本ぼに定植しない。なお、栽培中の株に炭疽病症状が見られたら、ただちに抜き取り廃棄する。発病部位の除去のみでは再発する可能性が高く、周りの株に感染が広がる可能性があるため、株ごと除去する。ハダニ類等は定植前に防除し、本ぼに持ち込まないように注意する。</p> <p>併せて、定期的な防除に努めるが、同一薬剤の連用は避け、ローテーション散布とする。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div> <p style="text-align: center;">写真 イチゴ炭疽病の症状 (左：小葉の汚斑症状、右：葉柄の斑点)</p>

項 目	作 業 内 容
(2)果菜類の管理	<p>エ 定植時の注意点</p> <p>土が乾いていると活着不良となるため、定植前に畝を十分に湿らせておく。花房の出てくる向きを確認し、深植えにならないよう丁寧に植え付ける。定植後は根鉢を乾かさないう、畝全体が湿るまでたっぷりかん水する。チューブかん水と手かん水を併用し、水のかかりムラがないようにする。特に、気温が高い時期の定植では、蒸散が激しいため、定植の数日前から寒冷紗で被覆して地温上昇を抑え、根の活着を促進する。</p> <p>高設栽培についても、培地が乾燥していると活着や初期生育が不良となるので、定植前後は培地を十分に湿らせておく。</p>
	<p>ア 追肥</p> <p>草勢を見ながら施用量や間隔を調節する。目安は、10 a 当たりチッ素成分2～3 kg を7～10 日間隔で施用する。肥効を早めたい場合は液肥施用が有効である。</p> <p>イ かん水</p> <p>土壌が乾燥すると、草勢や収量・果実品質が低下するため定期的にかん水する。</p> <p>トマトでは秋口から裂果の発生が多くなる。その原因として、果実への強い日射や朝晩の温度低下に伴う果皮の硬化、土壌水分の急激な変化等が考えられる。このため、かん水はできるだけ少量多回数とし、土壌の水分変動を少なくする。</p> <p>ウ 病虫害防除</p> <p>葉かび病、うどんこ病、灰色かび病、斑点細菌病、炭疽病、褐斑病等の病害や、タバコガ類、ハスモンヨトウ、ハモグリバエ類などの害虫の発生に注意し、早期発見、適期防除に努める。</p> <p>エ トマトの黄化葉巻病ときゅうりの黄化えそ病対策</p> <p>トマト（ミニトマトを含む）の黄化葉巻病はタバココナジラミバイオタイプ Q 及び B、きゅうりの黄化えそ病はミナミキイロアザミウマによりウイルスが媒介される。伝染力が強く、発病すると収量が著しく減少するなど、経営に大きな打撃を与える。</p> <p>防除対策として、今後定植する作型では、育苗～定植時におけるネオニコチノイド系粒剤の施用や定期的な薬剤散布、防虫ネット（目合い 0.4 mm 以下が望ましい）の被覆、発病株の早期抜取り、ハウス内外の除草等を行う。</p>

(3) 秋まき野菜の栽培管理

9月は、だいこん、たまねぎ等の播種や、はくさい、キャベツ、ブロッコリー等の定植時期にあたる。秋まき野菜は、短日・低温条件が進行していく中での作付けとなるため、作物、品種ごとの播種又は定植時期を厳守する。例年、9月中旬以降は雨の日が多くなるため、適期を逃がさないようにする。

また、これらの野菜は、初期管理が栽培の成否を大きく左右するため、ネキリムシ類等により地際部を切られたり、ダイコンシンクイムシ、ヨトウムシ類、コナガ等の食害を受けたりしないよう、ほ場をよく観察し防除する。

(4) 台風対策

【事前対策】

ア 施設野菜

○施設内の湛水を防ぐため、排水溝等を整備しておく。

○強風の際は、ハウス倒壊、ビニル破損を防ぐため、梁の継ぎ手・柱の接合部などにつなぎ材を入れ補強し、開口部は十分締め付ける。

○ビニルハウスでは、ハウスバンド等を締め直し、ビニルのたるみがないようにしておく。

○防風ネット等を点検し、適宜補強する。また、ほ場内外の飛散しそうな資材は撤去しておき、飛来物による被覆資材の破損に注意する。

○被覆資材が古く撤去を予定しているビニルハウスは、ビニルを張ったままにせず早期に除去する。

イ 露地野菜

○畝間に滞水しないよう、排水溝を整備する。

○収穫期に達しているものは、できるだけ事前に収穫する。

○防風ネットや支柱を点検し、適宜補強する。また、ほ場内外の飛散しそうな資材は撤去しておく。

○果菜類では、支柱やネットへの誘引を徹底し果実の風ずれを防ぐ。

○いちごの露地育苗架台では、パネルの固定を補強し、寒冷紗等のべた掛けにより風害を防ぐ。

○さといもの疫病は、高温（25℃以上）で連続した降雨条件下で発病しやすい。特に台風などによる強風雨後には、発生地域が予想以上に拡大することがある。このため、台風接近前にペンコゼブ水和剤を予防散布し、未発生地域においても発病には十分に留意する。

【事後対策】

ア 病害虫防除

○疫病、炭疽病、軟腐病等は降雨後に多発する恐れがある。土壌で汚れた茎葉の洗浄と損傷した茎葉の適切な処分を行い、すみやかに薬剤散布する。使用農薬の登録内容は必ず遵守する。

○さといもでは、台風通過後に治療効果のあるダイナモ顆粒水和剤、次いでアミスター20フロアブルを散布する。なお、疫病が発病した茎葉はほ場外に持ち出し（袋に入れて密閉）、ほ場内の菌密度を下げた後から薬剤散布を行う。

イ 排水対策と土寄せ

畝間や排水溝を整備し、早急に排水する。風で倒伏したら、株を引き起こして株元に土寄せし、しっかりと固定する。

ウ 施肥

根の活性が低下して、肥料の吸収が悪くなるため、液肥（500～1,000倍）や尿素（0.3～1%）等を葉面散布する。

エ かん水等

○台風通過後は、葉面からの蒸散が激しく、水分不足となりやすいため、必要に応じてかん水する。

○沿岸部で潮風を受けた場合は、真水で茎葉を洗い流し、潮風害を防ぐ。

オ 摘果

果菜類は、強摘果して着果負担を軽減し、根や草勢の回復を促す。

カ 補植・再播種

生育初期のほ場で、折損や流亡のため欠株が生じていたら、予備の苗や種子をすみやかに再定植あるいは再播種する。

（作成 農林水産研究所）